



文部科学大臣賞

もんぶかがくだいじんしょう

ぼくのこめづくり

埼玉県さいたま市立大久保小学校三年
さいたまけんしりつおおくぼしょうがっこうさんねん

杉森 健成
すぎもりけんせい

「おじさん、その苗ちようだい。」

ぼくのその一言から、ぼくのお米との短い夏がはじまりました。きんきゅうじたいせんげんの一回目、学校も休校になり気分転換で行くのが近所の田んぼだつた。田植えをしていたおじさんに、ぼくは何となく声をかけたのだ。

「おいしい米ができるといいな。むずかしいぞ」

そういつておじさんは大切なねの苗を分けてくれた。それから発芽スチロールに田んぼの土を入れて、つかまえてきたおたまじやくしも放した。おたまじやくしがいたほうが田んぼらしい。

小さかつた苗が毎日少しずつ大きくなるのがうれしかつた。大きなおにぎりを作つて、苗をくれたおじさんに届け、ぼくはカレーライスにして食べるのが樂し

みだつた。九月にしゅうかくをむかえた。できたお米は七十グラムほど。だっこくやもみすりで落ちた一つぶでさえもつたいたなかつた。

ほんのすこしとれたげん米をお母さんが白米にまぜてたいてくれた。げん米はやさしい黄色で、小さなおにぎりは、やさしい味がした。

「大変だつたね。でもおいしいね。」
と、家族で笑つた。

あたり前に毎日食べていたお米は、ごはん茶わん一杯作るのだつて大変だつた。おじさんに大きなおにぎりをとどけることもできなかつた。でも、ぼくは、一つぶ一つぶの大変さと大切さ、そこにだれかの思いがあることはわかつた。

大好きなカレーライスをたべるとき、ぼくはしあわせだ。お米があるから、カレーもおいしい。ぼくの夏の米づくりは、おいしさとやさしさと大変さがつまつた時間だつた。